

海市

福永武彦

海市

福永武彦

新潮社

海 市

●著者 福永武彦 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本 新
宿加藤製本所 ●発行所 株式会社新潮社
郵便番号 162 東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (03) 260-1111 振替東京 808 番
昭和43年1月15日発行 昭和49年2月28日21刷

定価 1250 円

著丁本はお取替いたします。© Takehiko Fukunaga
Printed in Japan 1968

海

市

海上蜃氣。時結樓臺。名海市。

「三齊紀略」

東方雲海空復空

群仙出沒空明中

蕩搖浮世生萬象

豈有貝闕藏珠宮

心知所見皆幻影

.....

.....

蘇軾「海市」

第一部

私はこの話を、私が蜃気楼しんきろうを見に行つたところから始めたいと思う。その時私は南伊豆さうどうの左浦という小さな漁村の、これまた小さな沢木屋という宿屋に泊っていた。私はふと思い立ってこの小旅行に出たのだが、東京を昼すぎに立つ頃は桜の花を散り急がせるような雨が降っていて、夕方に目的地に着いた時にはどうやら歇やすみ、次の一日は曲りなりにもお天気だった。しかし続く二日ほどはまたじとじとした春雨で、私は二階の奥の部屋に閉じ籠められたまま、いい加減、氣を滅入らせていた。その次の日の午後、やっとのことで雨があがったので、私は蜃気楼を見に岬の向う側へ出掛けて行つた。

その前の晩、私は宿屋のお内儀かみさんから、岬の向う側へ行けば蜃気楼が見られますと教えられていた。私は今迄にまだ蜃気楼というものを見たことがない。富山灣の魚津のあたりが名所だと聞いていたが、伊豆の海岸で蜃気楼が見られるなどとはついぞ知らなかった。多少の好奇心は動いたものの、大して本気にはしなかった。お内儀さん自身も実地に見たわけではないので、ただこの土地にそういう言い伝えがあり、もし運がよければ、そして岬の向う側へ行く機会があれば

（ということとは漁船で沖へ出ているか、または磯釣をしにその辺まで出掛けて行くか、とにかくじっとしていたのでは駄目なのだそうだが）たまには見られるということだった。現に宿屋の主人は幾回か見たことがあると、お内儀さんは真面目な顔で請合^{うけあ}った。このお内儀さんはもともと口数の少い、職業柄としては随分と不愛想な、しかし古風な瓜実^{うりざね}顔をした三十過ぎの女で、この沢木屋という小さな宿屋には飯焚き婆さんの他には女中もいずに、その人が一人で万事を取りきっていたが、夕食のあとで床を延べながら、私が慥然としてゐるのを憐^れんだものかこの話をしてくれた。しかし仕事が済むや、おやすみなさいとばかりそそくさと部屋を出て行った。夜は長く、私は雨の音を聞きながら、とても蜃気楼なんぞ見に行く日^ひ和^{より}にはなるまいと思い、いつしかそのことを忘れてしまった。宿屋の主人に確かめてみるほどの熱心さはなかった。

次の日の午後、私は押入から勝手に蒲団を出して敷き、そこに横になって本を読んでいたが、いつのまにかうとうとしたらしい。目が覚めてみると、雨は歇み、硝子戸に薄日が射していた。戸を明けると空には晴間が出て、空地を隔てた向う側の鎮守のある岡の杉林が美しい緑に光っていた。その時、蜃気楼の話が甦^{よみがえ}った。私は飛び起きるや、急いで宿屋のどてらを洋服に着替え、万一の用意にレインコートを持ち、あとはスケッチブックだけを手にして部屋を出た。帳場に声を掛けると、お内儀さんがお出掛けですかと訊いた。私は蜃気楼の見られるという場所を尋ねてその道順を教わった。

岬へは海岸沿いに行くことは出来ない。宿屋の前の空地を抜けて鎮守のお社の境内に出、岡の中腹の狐でも棲みそうな壊れかけた建物のすぐうしろから、坂道を裏山を越えて向うへ出るのがある。

雨は既にすっかりあがり、空は青みの部分を増して来つつあったが、まだ道は濡れてところど

ころ療にわたすみになつてゐる。境内に一本の桜の老樹があつて、既に枝についてゐるのよりもっと多くの花片はなびらを地面に散り敷かせていた。私はその桜の樹を暫く打仰いでから、裏山へ通う細い道を歩き出した。相当地に険しい勾配が続いて、身体がいつしか汗ばむのを覚えながら、滑らないように用心して登る。雑木林の中で眺望は利かず、頭の上の枝々からは時々滴が垂れて来る。片側が沢になった道の傍らを小さな溝が切つてあり、そこを潺々せんせんと水が流れてゐた。私は早くもくたびれてそこで一服し、草叢くさむすぶの中に咲いてゐるアイリスの花などを眺めていた。遠くから雉きじの聲が二聲ばかり聞えて来た。私はゆっくりと煙草を喫み終り、それからまた歩き出すと、漸く道は平らかになつてその暫く先からくだりになつた。足が軽くなると共に立木の方も次第に疎らになり、やがて海が見えて来た。浜から眺めるのと違つて、濃いエメラルド色が断崖の間に光つてゐる。私の足は知らず識らずのうちに一層速くなり、だから坂を一気に駆け下りた。

笹藪が終ると道は急に盡きて、その先はもう岩だらけの断崖の片側になつてゐた。そのそそり立つた絶壁の真下を、岩の上から上を拾つて歩く。靴の下に冷たくて固い岩の抵抗が感じられ、私が次々に足を動かす度に小さな舟虫が私の足音あしおとに驚いて四散する。私はゆっくりと足許を確かめながら進んで行つたが、あたりはひっそりして波の穏かな音が聞えるばかり。やがてくたびれて、とある岩の上に腰を下した。

岬といつてもごく小さなもので、磯釣にふさわしい場所だ。漁村を内懷うちかこに抱くようにして、海岸線が無数のぎざぎざした凹凸を持ち、小さな岬と小さな入江とが互い違いに海に向つてゐる。そうした岬の一つである。私は手で囲つて煙草に火を点けると、レインコートとスケッチブックとを岩蔭に残して、荒磯まで出て行つた。

波に洗われて時には飛沫しぶきのかかつて来る岩の上に立ち、私はあたりを眺望した。ここからは左

浦の港は見えない。右手にはもう一つの岬が、ここの間に深い紺碧の水を湛えた小さな入江を擁して、視界を遮っている。左手の側にも幾つかの岬が重なり合つて見えるが、どれも殆ど垂直な斜面に、海へなだれ込むような暗緑色の岩肌を露出させ、中腹から上の部分には、ひねこびた小松を一面にしがみつかせている。そして断崖の裾は波の飛沫を撒き散らし、単調な響きを繰り返している。目前には廣い海がある。その海の正面から右半分はやはり畳なづく絶壁の屏風が立ちふさがり、白い波が裾に碎けているのが見えるが、左半分は水平線が遠くの方で薄ぼんやりと空との境を劃っている。私の見ている正面には、漫々たる海を隔てて本土の海岸線がある筈だった。勿論肉眼では見えないだろうが、そこには大きな都会が幾つか海岸に沿つて散在する。もし蜃気楼があるとすれば（とその時私は思い出した）、それは空気の屈折で海の向うの都会の一部が拡大されて水平線の上に浮ぶのかもしれない。しかし今は、雨あがりとはいえ薄墨色の横雲が幾重にもたなびき、物の象らしいものを見分けることは出来なかった。

私はもとの場所に戻り、スケッチブックを開いた。風は穏かだったが、それでもスケッチブックの端を左手で抑えていなければならなかった。正面の海と、その向うの水平線、断崖の列、たなびく雲、荒磯、そうしたものを私は素早く写し取った。雲の間から、春らしいほやけたような太陽が時に顔を出し、また雲の間に隠れた。しかし私が二三枚描いている間に風は次第に冷たくなり、空は次第に雲の量を増して来た。あたりは相変らず静かで、たまに小さな機動船がポンポンポンという甲高い音を響かせながら、すぐ目の前のところを漁村の方へと通り過ぎた。一日の仕事を終つて歸つて行くのだらう。釣舟が二三艘波の上に漂っていたが、それも一つずつ消えてしまった。私は手を休め、腕時計を見、そろそろ戻ろうと思つて煙草に火を点けた。

夕暮が近づいていた。水平線の向うの西空が素早く変化していた。一面に黄ばんだ雲の群が、

明るい、^{だいたいいろ}橙色の地肌と隈取りをした紫とに染め上げられた。ちょうど水平線の上まで落ちかかった太陽が、雲の間から血潮を滴らせ、その血は黝^{くろ}ずんで水平線にこびりついた。「蜃気楼か、」と私は呟いた。「春さきの、雨あがりの夕方などによく見えるそうですよ、」と宿屋のお内儀さんは言っていたが、すると今はその条件に最もふさわしいことになる。私はレインコートを肩に羽織り、岩の上に立ち上って、水平線の向うに眼をくばっていた。

雲は水平線に平行して幾重にも重なり、その重なりの上に墨の滲んだような模様を或るところでは丸く或るところでは鋭く彫り出していたから、それが或いは丸味を帯びた岡や林であり、或いは屋根や煙突の屹立^{きつりつ}する町の風景であると、強いて考えられないことはなかった。つまり私が予兆を信じ、暗示に掛けられ、必ず蜃気楼が見られる筈だと思っていたのなら、私はた易くこの現象を信じただろう。しかし私は（そういう科学的現象は信じられても）ここへ、この岬へ、蜃気楼が見たくて来たわけではなかった。ただそこは景色がいいだろうから、折角の晴間を利用して岬からの眺望を愉しもうと思っただけだ。それ故、これは蜃気楼ではなく、単に夕暮の光線と雲のたたずまいとが作り上げた偶然の模様にすぎないと分っていた。それでも私には充分に面白かった。私は次第に褪めて行くこの抽象的な図柄を眺め、波頭が対岸の岩に白く砕けていたのもやがて識別しにくくなり、海の全体が黄ばみそして蒼黒く翳^{かげ}り、次第に一面の黄昏^{たそがれ}の淡い靄^{もや}に包まれてしまうまで、見守っていた。そして時の経つのを忘れ、自分の内部に一種の名状しがたい感動が充ち満ちて来るのを感じたが、やがて気を取り直し、帰り道のことを思っただけの岩の上から踵^{かかと}を返した。レインコートを着込み、落さないようにスケッチブックをしっかと小脇に抱え、さて岩から岩へと四歩か五歩、足許に注意しながら跳ねて来たところで、ふと何かの気配を感じて首を起した。そして先方のある岩の上に、一人の女が、まるで塑像^{そぞう}のようにこちら向きに立

つているのを見たのである。

私はぎよつとなつたままその場に立ち竦んだ。その女は灰色のスカートに桃色のスエーターを着ていたが、その桃色も日没の最後の余燼よじんに不吉なほど赤く血に染つたように見え、頭に巻いたスカーフのあまりが風のために鳥の翼のように顔のうしろで羽ばたいていた。眼はじつとこちらの方に向けられていた。しかし私を見ていたのではない。その眼は私の頭上を越えて、やはり海を、水平線を、雲を、——そして蜃気楼を、見ていたのだ。私もまた釣られてうしろを、つまりその女の見ている方向を見たが、刻々に變化して行く空の模様が、その瞬間にどんな象かたちを描いていたのか、さだかに見るだけの余裕はなかった。私は磁石に惹かされる鉄片のように、すぐに女の方に向き直り、再び一步また一步とそちらへと近づいた。女は眼の焦点を私に合せ、その白い顔に一種の表情が浮んだようだったが、果してそれが驚きなのか、不安なのか、羞恥なのか、それともまったく別の感情なのか、私には見当がつかなかった。油けのない髪が額の半ばを斜めに隠しながら風にそよぎ、殆ど眼の上にかぶさるようになっていたから、それで一層表情が分らなかったのかも知れない。私はやや離れたところから聲を掛けた。

「驚かせて済みません。蜃気楼を見にいらつしやつたのですか。」

私は丁寧な口を利いたが、それはこの若い女が土地の人間でないことを直に見抜いたせいだろう。ただ立っているだけで、彼女の周囲には一種の都会的な雰囲気、敢て言えば洗練あえされすぎた一種の頹廢的な空気が感じられた。黙つたまま答えなかった。私はすぐ側まで近づき、女はゆつくりと私の方へ身体をまわした。

「ここは蜃気楼を見るのにいい場所なんだそうですね。宿屋でそう教わつたのだが、僕にはどうもあれが蜃気楼だとは思えなかった。あなたにはどう見えました？」

女は尚も黙ったまま、殆ど物問いたげなとでもいうような眼つきで私を見詰めていた。その眼は大きく見開かれ、そこに一種不可思議な、私には理解できない感情が潜んでいた。私は弁解した。

「僕は沢木屋に泊っている者です。怪しい者じゃありません。」

その女には私の取ってつけたような弁解がおかしかったのだろうか、それまでの動かない表情が今にも崩れそうになって、しかしそれを隠すように身体をめぐらし、岩の上を道のある方向へと軽く飛ぶように歩き出した。私も釣られて歩き出したが、既に暗くなり始めた岩の上を、安全なところを選んで歩くためには、女の存在に氣を取られている余裕はなかった。女は私よりずっと身軽で、道の端のところ私を待っていた。

「だいぶ暗くなりましたね、」と言って、私はもう一度水平線の方を振り向いた。そこには残照が尚も西空を染めていたが、もう何かに見紛うような風景は残されていなかった。

「さっきは町の風景のように見えないこともなかった。しかしあれは僕の眼の錯覚で、本当の蜃気楼じゃなかったんでしょね。」

私は未練がましく空の方を顧みたまま、他に言うこともなかったのと同じことを繰返した。女はその時初めて口を開き、ささやくような低い聲で私に答えた。

「あたしには人の顔のように見えませんでしたわ。」

*

その夜私は例によって寝つかれなかった。意識の閾をさまざまのことが揺曳した。

私が南伊豆のこの小さな漁村に来てみたのは、大して目的のあることではなかった。この左浦の少し北寄りに友江^{ともえ}という漁村がある。この方は左浦よりも大きく、町といった方がいかもしれない。その友江について私を啓蒙してくれたのは、私の弟子分の若い画家木本良作^{きもと りょうさく}で、そこは観光客の行く筈もない辺鄙^{へんぴ}な港町で、名所もなければ旧蹟もないが、景色は大変いいと太鼓判を押した。「桜の頃はきつといいですよ。もつとも日本的な風景だから先生には向かないだろうが、」と彼は言った。それから木本は、友江の手前には左浦という小さな漁村があるし、友江から峠を一つ越えた先の海岸には落人^{おちうど}と呼ぶ平家の落武者の住んでいる部落があつて、そこはお花畑がそれに見事だというようなことを畳み込んで喋った。私がその話を聞いたのは暫く前のことだったが、新聞で桜のたよりなどを見ているうちに、ふとそのことを思い出した。自然というのも悪くないだろう、明るい海を見ることがで内部の衰弱から回復することが出来るかもしれない。そして海を見たいというただそれだけの衝迫が、思い立つや、不意に私の心を促した。私はそこに行つて休息と安静とを得たいものだと思つた。

従つて目的という程の目的があつたわけではないし、だいいち目的地は友江で左浦ではなかった。ところが下田からタクシイを傭つて友江に着いてみると、その二軒の宿屋はいずれも満員というので断られ、しかたなしに私はバスで左浦まで戻つて、一軒だけの沢木屋という宿屋に泊めてもらった。この方はひっそり閑としていて、二階建ての建物の中の部屋の硝子戸も、私が着いた時にはびたりとしまつていた。しかしその方が、満員の宿屋よりは休息に向いているだろうし、内部の衰弱にもいい効果があるだろう、と私は考えた。瓦葺の屋根と藁葺の屋根とが半々ぐらいを占めているこの小さな漁村は、折から満開の桜の花に飾られて、私の心をなごやかにした。

私の内部がどのように、そしてなぜ衰弱していたのか、それを急いでここに説明する必要もあるまい。それは長い緩慢な人生の歩みに伴って起ったことである。私のように、四十歳という若いようでもあれば老いたようでもある中途半端な年齢にいる人間は、この人生をどういうふうに受け入れればいいのか、まだ正確な見当がついていないと言える。諦めるには若いし、しゃにむに突進するには余分な分別はあっても青年の血気はない。現在の私の精神状況は、さまざまの瑣事や偶然の積み重なりの上に、次第に自分の運命をつくって行つた結果であり、衰弱の原因がどこにあったか、どの行為がこの状況を招いたものか、一概にきめてしまうことは出来ないだろう。我々の人生は脈絡のない無数の挿話から成り立っている。そのどれがつまりらぬ偶然にすぎず、そのどれが重要な運命の一環であるのか、容易に見さだめのつくものではあるまい。しかも時が経つにつれて、それらの挿話の或るものは脱落し、或るものはその人間の生の本質を示すものとして、因果関係のバズルの中に嵌め込まれることが出来る。しかし現在の時間の中にいる限り、我々はその現実が重要なものであるか否かを、まるで分つてはいないのである。私に出来ることは、自分に関しては過去の挿話を一つ一つ、順序もなく、その重みを量ることもなく、思ひ出すことであり、他人に関しては、彼等のあり得べき挿話を、一つ一つ、順序もなく、想像して愉しむことだけである。人生というものはばらばらの挿話の集積なのだというのが、四十年間の経験によって私の得た認識であり、従つて私が自分の衰弱を云々しても、それは明かに系統づけで私の内面の進化を、或いは退化を、私が理解した結果ではなかった。そして私が衰弱という時に、それは私、澁太吉、抽象美術協会の会員であり中堅画家として多少は人に知られた筈の人物が、作品の上でこのところろくな仕事もしていないという、ただそれだけを指しているのではない。私は藝術に於けるよりは人生に於て、より多く疲れていた。

その夜、私は寝つかれぬままに、夕方見て来た蜃気楼のことを考えていた。蜃気楼と言い切るわけにはいかない。私はあれが本物だったと信じていたのではない。あれは恐らく雲の描いた模様すぎなかった。ただその同じ模様が、或る人には町の風景のように見え、他の或る人には顔のように見えたというのが、私には面白かった。それはあの見知らぬ女が、常に忘れることの出来ない一つの顔を、執念のように心に抱いていたことを示すのだろうか。それともあの時の風景が、過去の映像の中の一つの顔を、たまたま思い起させたということなのか。どんな顔だろう。男の顔なのか女の顔なのか。一体あの女はどんな気持で、夕暮の人けのない岬などに現れたのだろうか。

風景も畢竟は人間ひつきよう的なものだ、と私は考えた。自然はそれのみでは美しくも醜くもない、それはただそこに在るというだけだ。人間の眼が見るからこそ風景は風景としての意味を持ち始める。そして人間の眼は各人各様に見る。同じ自然は人により異った風景として認識され、そこに各人の感情を吸収する。記憶を喚起する何かがあれば、平凡な風景もその人にとっては感動的なものになるだろう。初めて見る風景は、それが記憶のプールに未だ貯蔵されていないことによつて、印象を鮮烈ならしめるだろう。そして私は、心の平和を求めて、この明るい風景のある漁村を訪れたのだ。しかしあの女は、何を求めて岬へ蜃気楼などを見に行ったのだろうか。あの寂しい岬でどのような風景を見ていたのだろうか。

岬からの帰り道を私はその女と連れ立って歩いて来たが、道は細くて二人並んで歩くのは難しかったし、女はしっかりと足取でいつも私より先に立っていた。それに夕闇は裏山にはいると一層濃くなりつつあったから、私はせいぜい後ろ姿を偷み見るだけで、容貌を觀察することは出来なかった。小柄な、せいぜい二十三か四くらいの若い女で、スカーフにあまった髪がうなじの